

今こそ聞きたい!

決済高度化入門

第8回

ノンバンクプレイヤーの台頭と SWIFT gpi

麗澤大学
経済学部 教授

中島 真志



国際送金における SWIFTの役割

国際的な送金において重要な役割を果たしているのが「SWIFT」である。例えば日本のA行が米国のB行に送金を行う場合、A行からの送金メッセージ（支払指図）は、SWIFTのネットワークを通じてB行に伝えられる。このようにして、SWIFTは世界の200カ国以上、1万1000行以上の金融機関を結んで、国際的な支払メッセージの伝送サービスを提供している。SWIFTが存在することにより、世界中の銀行が相互に国際送金を行うことが

可能となっている。

SWIFTは、1977年に稼働を開始して以来40年以上にわたって国際送金の分野で独占的な地位を築いてきた。しかしここに来て、ノンバンクのプレイヤーがより速く・安い国際送金売り物にこの分野に続々と参入してきており、銀行を介さない海外送金が拡大している。このため、SWIFT（およびそれを利用して国際送金を行う銀行）の地位は、必ずしも盤石とは言えなくなってきた。参入事例としては、分散型台帳技術を使った「リップル」、送金同士のマッチングにより安価な国際送金を実現している「トランスファークワイズ」、独自の

送金ネットワークを構築している「アースポート」、限定された国を対象に安価なサービスを提供する国際送金業者などを挙げることができる。

SWIFTにおける 国際送金の改革

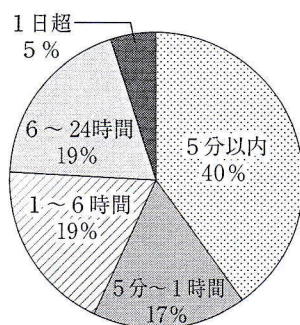
ノンバンクからの脅威への対策としてSWIFTが導入したのが「SWIFT gpi」(SWIFT global payments innovation) であり、従来の国際送金の仕組みである「コルレス銀行業務」を抜本的に改革することを目指している。gpiは、ノンバンクのプレイヤーの登場によって銀行間の国際送金が

「遅くて高くて不透明だ」と批判されるようになったことに対応して、銀行業界として低コストで迅速な国際送金を可能にするために開始された。

従来のコルレス銀行業務では、送金銀行A行と受取銀行B行との間に直接的なコルレス関係（為替取引の個別契約）がない場合、中継銀行としてC行が加わり、場合によってはさらに別の中継銀行D行が間に入るといったかたちで、伝言ゲームのようには送金指図を次々に伝達することによって送金を処理していく仕組みとなっていた。このため、処理にはどうしても時間がかかり、また複数行が関与するぶん、手数料も高く、その根拠



〔図表〕 g p i の着金時間



(出所) SWIFT

も不透明になる面があった。
これに対してgpiでは、新たなルールブックと機能追加により、①国際送金の即日着金、②手数料の透明性、③送金の追跡可能性などを達成することとしている。特筆すべきなのは「gpiトラッカー」という機能を導入した点だ。これは、顧客から依頼を受けた銀行が海外に送金指図を送る際に固有の「追跡番号」(トラッカー)を付け、それによって入金までのステータス(中継銀行で処理中、処理済みなど)を順次追跡していくものである。このgpiトラッカーにより、銀行(およびその取引先企業)は、送金がどこまで届いているのかをリアルタイムに知ることができるようになる。

g p i の機能拡充

gpiは、2017年1月から稼働を開始しており、世界の大手行280行が導入を決定している。そのうち、すでにgpiを使って送金を行っている「ライブ行」は約80行(日本のメガバンク3行を含む)で、SWIFTの国際送金のうち約3分の1がgpiによって行われている。これらのライブ行により、1日に130万件、金額ベールでは1000億^{ドル}以上の国際送金が行われており、残る導入予定行の取扱量を合わせると、SWIFTの国際送金の80%を占めることになる。そのため、将来的にはgpiによる送金が主流となる見込みである。

送金が着金までに2～4日を要していたのに比べると大幅な改善である。さらに、gpiは18年11月から「ステージ2」に入り、三つの拡張がなされた。

第1に、すべての送金にトラッカーを付番することが義務づけられた。つまり、gpiの未参加行も含め、自行が発出する送金指図には、すべてトラッカーを付番することが求められる。また、中継銀行では受け取ったトラッカーを、必ずその先の銀行に引き渡すことが求められる。これらにより、すべての送金が追跡可能となった(オール・ペイメント・トラッカブル)。

第2に、送金の途中であつても、送金の中止や取消しができる「ストップ&リコール」が導入され、必要な場合には、gpiを使って送金をキャンセルできるようにになった。これにより、疑わしい送金をただちに差し止めることが可能となった。

第3に、gpiの対象範囲が「顧客同士の送金」から、銀行間での送金資金の払込である「カバールペイメント」にまで拡大された。

19年中には、すべてのSWIFTユーザー(gpiの未参加先も含む)が、送金指図のトラッキング(追跡)を行うことができるようになる。これを「全員のためのトラッカー」と呼んでいる。

このほか20年には、すべてのSWIFTユーザーに「着金通知」(コンファメーション)の発出が義務づけられる。これにより、すべての送金銀行が、自銀行から送った送金が、いつ受取銀行に着いたかを知ることができるようになる。さらに20年末までには、すべてのSWIFTユーザーが送金指図のステータスをgpiの追跡機能に報告することが義務づけられる予定である。

こうしたgpiの機能拡充により、SWIFTでは、「gpiが新たな標準(ニュー・ノーマ)になる」としている。一方、ユーザーにとっても、機能拡充は国際送金のスピード・透明性・追跡性が向上するという点で望ましいことだが、個別行では相応のシステム対応が必要になることを付言しておきたい。◆